

2021年度 国公立大学入試

世界史

学校法人 河合塾 世界史講師 山内 秀朗

2021年度の国公立大学入試では、共通テストの導入元年ということもあってか、資料読解を要求する問題が目立った。また、空間軸と時間軸、世界史の中の日本、第二次世界大戦後史などの近年の新傾向は定着したとみていいだろう。一方でコロナ禍などの状況は、今年度の入試に大きな影響を及ぼしている。国公立の多くの大学では、学校閉鎖などで学習時間不足の状況にあった現役生に対し、一定の配慮が見られた。事前に告知していた東京外国語大学の他、東京大学、京都大学などでその傾向が顕著であった。問題の内容でも、黒死病など伝染病の影響を問う問題が多く出題された。同様に、世界的な女性の権利や人種差別反対運動の高揚の風潮を受けてか、人権に関する問題も出題されていた。以下に紹介し、詳しく分析していきたい。

1 資料読解を要求する問題

東京外国語大学や一橋大学などで引き続き資料読解を要求する問題が出題された。一橋大学第2問「ゲーテの時代とレンブラントの時代」は、絵画資料と文字資料をともに用いて読解を要求するものであった。用いられた絵画資料は、レンブラントの「織物商組合の幹部たち（オランダの毛織物ギルドの見本調査官たち）」である。この絵画は帝国書院の『新詳 世界史 B』（以下、教科書）のp.162にも掲載されている。絵画の説明文の“アムステルダムなどの大都市の豪商たちが金融業に進出し、「商人貴族」として政治の実権をもにぎっていた”は、問題の要点をついていると思われる。大阪大学第2問 問1「キリンが永楽帝に献上された背景」も、絵画資料の読解を要求するものであった。教科書の「Skillを高める 資料からよみとく歴史の世界」などを利用した学習が必要であろう。神戸市外国語大学では第3問 問2で世界恐慌期の「ブラジルのコーヒー輸出」に関する三つのグラフからブラジルのコーヒー農園での請負農夫の賃金低下の理由を200字以内で述べさせる問題が出題された。グラフを用いた問題にも注意が必要で

ある。東京学芸大学第2問 問8「アテネとローマにおける市民権をめぐる状況の違い」、新潟大学第1問 問2「ハンムラビ法典の内容」、東京都立大学第4問「戊戌の変法」なども資料読解を要求する問題であった。

2 「世界史の中の日本」に関する問題

愛知教育大学第3問は、「東アジアの交流関係」がテーマとなっており、問3で「南朝と倭」、問8で「倭寇」、問9で「琉球と台湾の日本統治」を問う問題であった。東アジア史の枠組の中で日本を扱う問題は近年増加している。また、名古屋大学第2問は、梁啓超が1901年に日本で発表した文章を問題文として引用し、問1(2)では日本を舞台に展開した中国の政治運動が問われた。

■例題1 2021年度 名古屋大学：第2問 問1(2)

(2) この改革運動（注、変法運動）は保守派のクーデターによって失敗したが、梁啓超は日本へと亡命し、言論活動を続けた。このうち、日本を一つの舞台として、中国の政治運動が展開したが、それはどのように展開したか。「義和団事件」、「科挙」、「留学生」、「中国同盟会」、「孫文」の五つの語句をすべて用いて、説明しなさい。（語句の順序は変えてよい）（解答欄は5行）

日本を舞台とした中国の政治運動については、教科書p.248が詳しい。同ページ掲載の「視点をかえて」は、「梁啓超のアメリカ紀行」をテーマとしたものである。同ページには「日本滞在中の孫文とその友人たち」の写真が掲載されている。また教科書p.251には、「日本滞在中のファン＝ボイ＝チャウとその支援者たち」の写真があるので、確認しておきたい。世界史の舞台としての日本をテーマとした問題も、今後増加するのではないだろうか。

3 時間軸・空間軸に関する問題

空間軸のテーマとして、同時代における国際交易・分業体制の構築は頻出のテーマとなっている。特に、サハラ縦断貿易、ガレオン（アカプルコ）貿易、大西洋三角貿易は、いずれかの大学で出題されるようになった。今年度は、サハラ縦断貿易は京都府立大学、名古屋大学、

アカプルコ貿易は京都大学、大西洋三角貿易は東京学芸大学などで出題されている。東京学芸大学では七年戦争とその影響についても出題された。文化面での交流に関しては、千葉大学第1問で、「イスラームの中世ヨーロッパ世界への影響」が300字以内の論述問題で問われた。京都大学第1問も、「宣教師の中国での活動」を問う300字以内の論述問題であった。一橋大学第1問は、「ハギア＝ソフィア聖堂の意味の歴史的变化」を400字以内で問う典型的な時間軸の問題であり、東京大学第1問は、「5世紀から9世紀にかけての地中海世界において3つの文化圏が成立していった過程」を600字以内で問う空間軸・時間軸の理解が共に必要な問題であった。国公立大学の論述問題対策として、時間軸・空間軸理解は必須であるといえる。『最新世界史図説 タペストリー十九訂版』（以下、『タペストリー』）の「世界全図でみる世界史」などが、学習に際して有用であると思われる。

4 第二次世界大戦後史に関する問題

第二次世界大戦後史の出題も定着した。東京外国語大学第1問の500字以内の論述問題は、「核軍備の増強、反発、均衡の歴史」であった。核兵器関係は、昨年度も京都大学第3問の300字以内の論述問題で出題されている。千葉大学第3問は、アジア・アフリカ会議開催に向けての時期の「アジア・アフリカ諸国の協調、結集の意義」を、資料の読解を含めて200字以内で問う問題であった。こうした定番のテーマといえる問題に加え、より現在に接近した時代を扱った問題が出題されるようになったことが、近年の傾向としてあげられる。今年度は、1980年代を中心とする問題が、名古屋大学第4問「1980年代の社会主義国の変化」(350字以内)、一橋大学第3問「文化大革命の経緯と1980年代の中国」(400字以内)で出題されている。また、京都府立大学第3問(B)は、「第二次世界大戦後の台湾の政治的動向」を200字以内で問う問題であるが、指定語句に「陳水扁」があることから、2000年の民進党による政権獲得まで範囲となっている。こうした問題は、「現代世界の諸問題」とその歴史的背景に関する出題として考えることもできる。例えば筑波大学第4問は「19世紀半ばから20世紀半ばまでの中国とアメリカ合衆国にかかわる諸問題」についての400字以内の論述問題であり、今日の世界で大きな存在感をもつ中国とアメリカ合衆国の関係が、どのようにして形成されてきたかの視点からの問題と考えられるだろう。また、これらは、昨年度の『サクラサク入試分析』で必須テーマと指摘した「日本と近

隣地域の近現代史」の出題でもある。

5 伝染病や人権問題など時事的な問題

14世紀のペストの流行による人口の減少が、ヨーロッパに与えた影響を問う問題は、東京大学第2問問(1)(a)「中世末の農民の地位向上の要因」(例題2)、千葉大学第2問問3「農民一揆と社会の変容」、京都大学第4問「黒死病の流行と独立自営農民」などで出題された。

■例題2 2021年度 東京大学：第2問 問(1)(a)

(a) 14世紀から15世紀にかけての西ヨーロッパでは、農民による反乱が起こる以前から、農民の地位は向上しはじめていた。その複数の要因を3行以内で説明しなさい。

教科書 p.107-108 では、貨幣経済の浸透や、ペスト(黒死病)の流行による人口の減少などが要因としてあげられている。この箇所をまとめることで、解答は作成可能である。ペストについては、教科書 p.118「一体化する世界 13～14世紀 ユーラシア大交流圏の成立と危機」で、「14世紀の交易とペストの広がり」の地図とともに、モンゴル帝国のユーラシア大交流圏の形成が、ペスト流行の背景となったことが説明されている。モンゴルネットワークによるペスト流行については、2015年東京大学第1問のモンゴルネットワークのテーマ問題で、ペスト(黒死病)が指定語句となっていた。人の移動が疫病の拡大につながることは、現今のコロナ禍でも指摘されているところであり、こちらの視点にも留意しておきたい。また、九州大学第1問は、600字以内で「普通選挙制の実現と女性参政権の拡大の過程」を問う問題であり、同じく九州大学第2問問3の「オーストラリアへのイギリス人入植」も先住民の迫害に関連する問題であった。東京大学第2問問(3)(b)では、「アパルトヘイト」が問われた。名古屋大学第1問の問10では、a)で「公民権運動の背景となった政治状況」、b)で南アフリカで黒人差別反対運動の先頭に立ち、黒人初の大統領となった人物として「マンデラ」が問われた。

6 来年度の展望

コロナ禍での学習不足に対する配慮は今年度限りであり、来年度は、例年並みの難易度に戻ることが予想されるので注意されたい。今回の分析で紹介した傾向は、今後も続くと思われる。人権問題は、時事的な問題であるとともに、国民国家との関連からの出題も予想される。オリンピックと近現代史の関係にも留意しておきたい。